

子どもの言語環境

～保育士を目指す学生が学ぶべきこととは～

鈴木 健一

Linguistic Environment of Children Things that Future Childcare Worker Needs to Learn

Kenichi SUZUKI

言語環境 言葉の指導 交流学习

1. はじめに

わたしたちが用いている言葉は、「ある意味を表すために、口で言ったり字に書いたりするもの」と定義される。

さらに詳しく見ていくと、言葉は、

- ① 音韻・音声、母音と子音、音節、アクセントなど
- ② 文字・漢字、かな、ローマ字、補助符号、かなづかい、筆順など
- ③ 語彙・量、分類、和語と漢語の特色、変化など
- ④ 文法・語論、文論、文章論、敬語などの四つの観点からとらえられるものである。

ところで、わたしたちが言葉を有用と考えるのは、何かを表すためにということ以上に、伝え合うことにおいてである。表情とか身振り手振りとか、鐘とか太鼓とか、信号とか標識とか、言葉によらないコミュニケーションの方法はいくつもある。しかし、確実性や簡便性から、言葉に勝るものはなく、私たちの日常生活におけるコミュニケーションの方法は、大部分が言葉となっている。

したがって、コミュニケーションツールとしての言葉の習得は、社会の構成員として不可欠なことである。子どもは、生まれ落ちた社会の中で、その社会で生きていくために必要な言葉を、自然に習得したり意図的に学習させられたりして、知識と共に活用能力をも身につけていく。

子どもの言語能力は6歳ぐらいまでに基本的なものができあがると言われる。保育士は、まさにこの時期の子どもたちの成長の「伴走者」とも言える存在である。したがって、保育士自身が言葉についての学びを深めていくことも、きわめて重要である。

本稿では、保育士を目指す学生のために、言葉に関してどのような学びが用意され、さらに必要とされるのかを考えていきたい。

2. 学生が求められているもの

(1) 幼稚園教育要領から

学生が求められているのは、どのようなことだろうか。まず、要領から見てみる。

幼稚園教育要領¹⁾では、領域「言葉」で、

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

という目標が設定されている。

ねらいは

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

の3本が示されている。

さらに、内容として

- (1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみを持って聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常のあいさつをする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。

(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。

(10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

の10項目が示されている。

なお、領域「環境」でも、

- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、ものの性質や数量文字などに対する感覚を豊かにする。

というねらいが示され、

(9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

という内容が示されている。

さらに、領域「表現」でも、内容として

(4) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。

(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

と示されている。

この幼稚園教育要領に示されている目標やねらい、内容を一人一人の子どもたちに実現していくことが、保育者に望まれているのである。

したがって、学生は、これらの意味するところを十分理解した上で、自らの資質を高め豊かにしていかなければならない。そのための学びが必要ということになる。

(2) 保育者という立場から

学生は、将来、保育者として子どもの言葉の発達に関わっていく。そのような立場に立つ者のあり方として、次のような提言がなさ

れている。²⁾

1 方言

- ・保育の場では方言は禁物。共通語で。

2 敬語

- ・敬語をきちんと使う。

3 幼稚園語

- ・「お」ことばの使用も平明簡素に。

4 保育者の話し方

- ① 愛情を持って話す。
- ② ことばを選ぶ。
- ③ 園児の呼び方は、園の呼び方の方針で。
- ④ 短い文で表現する。
- ⑤ あいさつは正しくする。
- ⑥ 若者ことばは使わない。
- ⑦ 口ぐせことばに注意する。

5 発問と助言

- ① 発問を先に、指名まで少し間を取る。
- ② 十分に間を取って、全員によく考える時間を与える。
- ③ 繰り返し発問をしなくてすむように、ゆっくりと一度だけ発問する。
- ④ 子どもの発表や意見を最後までよく聞く。
- ⑤ 論理的、具体的な助言やことばかけをする。
- ⑥ 子どもが安心感や信頼感を持って話せる雰囲気を作る。

6 保育者の発声

- ① 愛情のある態度で
- ② 正しい姿勢で
- ③ 自然な声で

- ④ 適度な高さで

- ⑤ 正しい発音で

保育者のあり方を説いているものは、他にもある。岡田明氏編の書から、関連するところの見出しを取り出して整理してみると、次のようになる。³⁾

I 聞く力を育てるために

- ⑤ 保育者は良い聞き手となろう
- ⑥ 保育者は聞きやすい環境を構成する。
- ⑦ 絵本やお話など言語文化とかかわりの持てる環境を用意する。

II 言葉による表現を豊かにするため

- ① 子どもがゆったりとした気持ちで話せるようにする。
- ② 保育者が受容する気持ちを持つ。
- ③ 保育者は、子どもの言動をよく観ていることが大切である。
- ④ 答える（応答する）。
- ⑤ 個人差への配慮
- ⑥ 安心して話すことのできる場を整える。
- ⑦ 保育者自身の言葉による表現からの影響

- ⑧ 言葉を育む環境を豊かにする。

III 考える・想像する力を育てるために

- ① 子どもの考えを尊重する。
- ② 子どもの行動を見守る。
- ③ 保育者が受容する心を持つ。
- ④ 環境を整える。

なお、見出しとしては立てられていないが、

IV 標識や文字・記号などへの興味や関心を育てるために の項では、「保育者としては、子どもが標識や記号、やがては文字に関心を示すことのできるような環境を準備することが大切なことであろう。」と記されている。

3. 学生の学びの実際

(1) 教科学習での学び

筆者は、授業科目「国語」の中で言葉に関する指導を進めてきた。詳しくは後掲の資料1シラバスを参照いただきたいが、内容の一端を紹介する。

この授業は、胎児は生まれる前から母親の言葉（声）を聞き分けているというアメリカでの実験結果を知ることから始まった。次いで、自分自身の発語経験を調べて発表し、その特徴を考えると共に、子どもの言葉の発達を一般化して理解を深めた。

次の段階では、母国語である日本語の特徴を、音声、文字、語彙の面から再確認した。

さらに、言葉の使用者としての能力や技術を高めるために、話す・聞く、読む、書くの各言語活動に沿った実践的な学びを行った。

学生は、この授業を通して、習得すべき知識や技能を確認し、実践的な学びにつないでいくことになった。

(2) 実習での学び

学生は、実習で新たな気づきを経験し、実践的な知識や技能を積み上げてきている。提出されたワークシートから、学生の学びを事例として拾い上げ、いくつかの観点から整理してみる。

① 子どもたちの言葉や言葉の使い方的印象

深かったこと

〔言葉〕

- ・登園時に敬語であいさつする子が多かった。
- ・5歳児女児 吃音 言葉が出ない。
- ・「やばい」という言葉を使っていた。
- ・大人が使うような言葉を使っている子もいた。
- ・「さしすせそ」が「ちゃちちゅちえちよ」になってしまう男の子がいました。(4歳児)

〔使い方〕

- ・4歳児の女の子が、クラス担任の真似をして、静かに読書をしていない子に向かって「そんなんじゃ年長さんになれませんよ。もう一度年中さんする？」と言っているのを聞いたのが印象的でした。
- ・ピアノを間違えたときに、5歳児が「先生のせいじゃないよ」「先生は悪くないよ」と、大人に対する気遣いや励ましの声掛けをしてくれた。
- ・4歳児が、砂場に落ちていた白くとがった石を見て、「サメの歯だ。すごいね。」と言っていたこと。

学生は、実習以前に子どもたちと接した経験が少ない。そのため、子どもたちの発音や乱暴な言葉、大人の使う言葉を耳にして、驚きを感じている。

また、先生の言い方を真似して表現したり、気遣う気持ちを適切ではないが精一杯表そうとしたりしている言葉遣いに、気づき驚いている。最後の事例からは、言葉遣いと共に、その子の発想や認識のすばらしさにも感動していることがわかる。

② 子どもたちが表現する場面で起こったできごとと対応

・〈できごと〉5歳児で「先生、あのね」と話しかけてくる男の子がいた。しかし、話を聞いてみると「あのね、あのね、えっとね」と口ごもり、伝えたいことはたくさんあるのに、うまく言葉にできないようだった。

〈対応〉せかさず、ゆっくりとその子の言葉が出るのを待ち、うまく言えないところは「○○だったんだね」とオウム返しをしたり、「こうだったのかな」と言い換える形で正しく言い直すようにした。

・〈できごと〉こだわりが一人一人違うので、思い通りにできないときに子ども同士のケンカに発展した。その際、「自分はこうしたい」と伝えられても、「どうしてこれがいいのか」理由を言葉で伝えられず、お互いに困っていた。

〈対応〉子どもと同じ目線に立ち、一人ずつ話をきいて、一つずつ整理した。その中で選択肢を与えたり、理由をきいてみたりし、「困ったね、先生も困ったなあ〜」と共感しつつ、私自身の気持ちも伝えた。

・〈できごと〉4歳の子ども達がおままごとで遊んでいた際に、一人が近くの子に気がつかずにフライパンをおつけてしまい、固まって何があったのか言えなかった。

〈対応〉周りの見ていた子から何があったのか教えてもらい、本人に確認をして、まずは「痛かったね」と言いながらけががないか確認をし、子どもの気持ちに共感してから、今度は痛かったら痛いよと言っていいんだよと伝えた。

自分の思いを言葉にできずに立ち往生したり、泣いてしまったり、ケンカに発展してしまったりという子どもたちに、学生は出会っている。

指導教員からの助言があつてのことであるうが、慌てずにじっくりと対応することができている。子どもの反応を待っているし、共感しながら子どもの気持ちを解きほぐし、どうすればよいのかを考えさせて、次につなげている。

③ 言語能力の自己評価

ほとんどの学生は、実習中に自分の言語能力の足りなさを感じている。学生の回答を以下に整理してみる。

(ア) どのような場面を感じているか。

〔説明〕

- ・責任実習でゲームをした時、ルール説明がうまく伝えることができなかった。
- ・先生これどうするの?ときかれて、ながながと答えて混乱させた。

〔話題選び〕

- ・保護者との挨拶で、何と言っていいかわからなかった。
- ・少しの間があったときに、すぐ話題になるものが出せるとよかった。

〔子どもへの対応〕

- ・泣いたり興奮している子どもが一生懸命に私に泣いている理由を説明してくれていたが、なかなか理解できず、なだめることしかできなかった。
- ・子どもの発言を拾いすぎて、まとめられ

なくなりました。

〔トラブル時の対応〕

- ・4歳児で、ブロックのとりあいになった時、お互いの事情をきき、一緒に遊べないか、もう少し時間がたってから交換しないかと、いろいろ提案したのですが、すべて却下されてしまい、担任の先生に解決していただきました。
- ・喧嘩してしまっている子どもの気持ちを代弁する際、うまくまとめることができず、子どもは、納得しているのか、どこがいけなかったのかわかったのか、微妙な反応だったので、自分の言葉が足りなかったと思いました。

〔言葉遣い〕

- ・子どもの前できちんとした言葉が使えなかった。つい友達としゃべるようになってしまった。
- ・しゃぼん玉を作る前に話をするとき「大きいのをつくってみてね」と言うような場面で「でかいのつくってみてね」と言ってしまったことです。

〔用語選び〕

- ・保育士の方と話をする時。敬語力。
- ・気持ちは褒めたくても、褒め方・声かけがいつも同じようにしか言えないことが多かった。

〔書くこと〕

- ・日誌を書くとき、文章を考えるのに時間がかかる。
- ・一日の反省として日誌を記録する時、どのような言葉で書けばいいのか分からなくなってしまう、文章になっていない時

があり、書く力の足りなさを感じました。

〔文字〕

- ・日誌を書くときに、漢字が出てこないときがたくさんあった。
- ・子どもが日記に「今日わ」と書いていて、「今日はの“は”は“わ”じゃなくて“は”だよ」と教えると、「どうして“わ”じゃなくて“は”なの？」と聞かれて、どうしたらいいんだろうと悩みました。

〔読むこと〕

- ・何度か読み聞かせをした時に、読み間違いをしてしまった。
- ・絵本を読む時、ひらがなだけが並んでいると、つかえてしまい、上手にスラスラ読めなかった。

〔その他〕

- ・外国人の子との会話
- ・(自分の)鉛筆の持ち方がそもそも変。改善したい。

子どもへのものごとの説明や、子どもからの話しかけへの対応やトラブル時の対応に、力不足を感じたという回答が多く見られた。これらは話す・聞く能力に関してであるが、書く・読むの言語活動の場面でも挙げられている。

言語に関する知識はもちろん、その運用技術の面での向上が求められる。

(イ) これから磨いていきたい言語能力

学生に、これから先保育活動をしていく上でさらに磨いていきたい言語能力を、順位を付けて三つ挙げてもらった。結果は次のようであった。

子どもの言語環境

	1位	2位	3位
ア 話を聞く力	20	14	21
イ 話す力	82	30	12
ウ 読む力	3	7	8
エ 書く力	17	26	41
オ 文字力	7	13	18
カ まとめる力	10	48	39
キ その他	0	1	0

数字は指摘された数。対象者 139 名。

その他の 2 位の回答は、「理解力」であった。

この回答内容に、1 位は 3 点、2 位は 2 点、3 位は 1 点を与え整理してみると、以下の表のようになる。

	得点	ランク
ア 話を聞く力	109	4
イ 話す力	318	1
ウ 読む力	31	6
エ 書く力	144	3
オ 文字力	65	5
カ まとめる力	165	2

④ 言語環境

学生は、子どもたちの言葉で表現する力を育てるためには、言語環境が大切になることも、実習先で学んできている。例えば、次のような記述が見られた。

〔保育者〕

- ・まずは保育者自身がきれいな言葉づかいややさしい口調、豊富な語彙表現で話していくことが必要だと思いました。
- ・子どもたちがうまく言い表せない時でも、その子の感情を大人が代弁してしまうのではなく、少し時間がかかっても受け止めることが大切だと思います。

〔文化財〕

- ・絵本や紙芝居を積極的に取り入れる。
- ・絵本の読み聞かせで言葉に親しませる。

〔場の設定〕

- ・表現できるように、みんなの前で発表した話したりする機会を作る。
- ・当番発表などをして、人の前に立ってしっかりとお話ができるように、毎日の生活の中にそのような場をもうけていた。

学生は、言語環境を整えることが重要だということに気付いている。そこでは絵本や紙芝居などの文化財を整えたり活用したりすることはもちろん、子どもたちが安心して言語活動に取り組めるような機会を設け、支援していくことが必要だと理解してきている。

さらに、物や場だけでなく、保育者つまり関わる人そのものも極めて大切な言語環境であることを認識している。

4. 学びを深めさせるために

(1) 交流活動

学生のそれぞれの学びは、貴重なものであった。ただ、それが広く一般的に通じるものなのか、限定的なものなのか、彼らは判断できないでいる。

また、経験できなかったことがまだあるのではないかという思いも持っている。

そこで、グループ内で体験を交流する場を設けることにした。4、5名でグループを作り、実習先での体験を発表し合った。その際に作られたメモの例が、後掲資料2及び3である。

また、学習後の感想には、例えば次のように記されていた。(下線部は筆者)

- ・子どもの言葉を引き出すことは、保育者にとってとても大切なことだと思います。保育者が子どもの心の中の想いに気付くことができても、子ども自身がそれを言葉で表現できなければ、成長に繋げることはできません。保育士の役割は、子どもにどう負担をかけずにスムーズに言葉を表現させるかだということを学びました。子どもの想いを受け止め、まずは気持ちにより添うこと、時には子どもの言葉を代弁してあげることも必要です。他の人の意見も聞くと、援助の仕方は人それぞれありました。しかし、どの意見も子どもの気持ちを考えて、言葉を生み出すための援助で、自分の中にはなかった考えがあり、吸収することができました。また、プリントで子どもの泣く、怒るなどタイプ別に母親の良い対応悪い対応が書かれており、それを読むと、一見、泣く、怒るは悪い行動に見えます。しかし、それは一種のサインでもあるといえます。泣いたからといってむやみに叱るのではなく、今何か伝えようとしているのだということを考え、優しく声掛け、それに応じた援助をすることが大切だと学びました。また、表現できる環境づくりも重要だと思います。絵本や身近な植物、身体を通して子どもが感情を伝え合うことができる環境をつくってあげたいです。
- ・普段から気持ちや思いを伝えやすい環境を作ることが大切だと思いました。そのためには、聞く姿勢、ほめること、話す機会を多く作ってあげることをしていく必要があります。「なぜ?」「どうして?」に答えてあ

げること、言葉をはぐくむことにつながると思います。絵本を読んで頼まれたら、何時間でもつき合ってあげるという姿勢が大切だと思っています。絵本を通して気持ちを共有することは、その子の内面を知る機会でもあり、言葉に出す機会でもあるからです。また、家庭との連携も欠かせないことを学びました。保育の場だけでは補いきれない部分もあります。保護者の方にも現状を知ってもらい共に育てていくという姿勢を大切にしたいと思いました。

- ・今回の授業で、他の園での子どもたちの様子を少し聞くことができて、とても良い機会になりました。私が実習で入らせていただいたクラスは4歳児クラスでしたが、グループの人たちの話を聞いていると、私と一緒だと感じることが多く、年齢によってどの園でも同じような様子が見られるのだなと思いました。また、実習の中で、同じ年齢でも話し方や速さは様々で、発達のスピードには個人差があることを改めて感じました。その個人差を受けとめ、一人一人のペースに合わせてゆっくりと援助を行っていくことが大切だと感じました。そして、言葉に興味を持ち、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことが楽しいと思える環境をつくっていけたら良いと思いました。話し合いの意見で出たように、絵本をたくさん読んだり、ゲームや遊び、また生活の中で言葉をたくさん伝えていけるようにしたいです。まだ11月に実習があるので、その実習でも、子どもたちの発達の様子や先生方の援助のしかたなどを学んでこられるように

したいと思います。

・言葉が出ない子どもについてのところで、私が出した事例の場合は、子どもが何か私に対して話したいことがあるがうまく言葉にならないという状態だったので、私自身が親身になって子どもの言葉をゆっくり聞くという対応ができましたが、他の事例を聞き、子ども同士ではそうはいかなということを感じました。気持ちを言葉で伝えることができないと、嘔みつきや手が出てしまうなど、気持ちを行動に出してしまうので、喧嘩や怪我の原因にもなりかねないと感じ、保育者が子どもの間に立って、気持ちを代弁したり、もしくはどのように伝えれば良いのかを教えていくことが大切だと思いました。また、子どもたちは大人の言葉をよく聞いており、保育者の言葉や話し方などが子どもの言葉を左右すると思いました。子どもたちが豊かな言葉で気持ちを表現していけるようにするには、まず、保育者が、手本になるよう表現豊かな言葉で話し、言葉遣いや話す口調にも気をつけていくことが必要だと思いました。

仲間の体験談を聞くことで、自分が直面したことやそこから気付いたことが、決して特異なものではなく、共通して見られるものだという認識を得ている。

また、自分が体験しなかったことを聞き、この先自分が同じような場面に遭遇したときに何とかできそうだという手がかりを得ている。

さらに、言語活動ができる環境をつくることの大切さだけでなく、家庭との連携を取る

ことの重要性、自らがモデルとなる豊かな言語活動をしていく必要性に気付き、視野が広がっている。

(2) 次の実習への動機づけ

この学習は、同時に、次の実習への動機づけの意味も含んでいた。前記の記入例の中に、「話し合いの意見で出たように、絵本をたくさん読んだり、ゲームや遊び、また生活の中で言葉をたくさん伝えていけるようにしたいです。まだ11月に実習があるので、その実習でも、子どもたちの発達の様子や先生方の援助のしかたなどを学んでこられるようにしたいと思います。」とあった。学生の思いは皆同じであり、仲間との交流から得られた知識や対応のアイデアを自分のものとして、実習でさらに学びを深めようという姿勢が見られた。

(3) 学びの再構築

実習での体験を意味づけ、子どもと言葉の関わりや指導のあり方とその留意点などを「保育内容の研究（言葉）」の授業で一緒に考えた。また、絵本の読み聞かせやカルタづくりに取り組ませ、理解を深めさせると共に、技能の定着・向上を図った。

5. 結びにかえて

学生が、言葉についての理解を深め、子どもたちへの言葉の指導を効果的に実現していく能力を身につけていくことが、望まれることである。

そのために、

- ① 教科での学習 ⇒ 実習での学び
⇒ 教科での学習 というサイクルを

もつ。

② 交流学习を採り入れる。

という取り組みをしたが、これは学びの深まり、視点の広がりという点で有効であったと言える。

しかしながら、実習の場でうまく対応できなくなってしまうことは、なかなか改善されない。経験が不足していることも原因の一つであろう。模擬体験ではあるが、応答や声掛け、絵本の読み聞かせの実演などを数多く体験させたい。そうすることで、積極的な参加姿勢につながり、学びの深化・拡大につながっていくものと考えている。

6. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレール館 2010
 - 2) 田上貞一郎・高荒 正子『新訂 保育内容指導法「言葉」』萌文書林 2016
 - 3) 岡田明編『【新訂】子どもと言葉』萌文書林 2016
- ・『広辞苑』第六版 岩波書店 2008
- ・井上尚美『国語』創価大学出版会 2001

子どもの言語環境

【資料1】「国語」のシラバス

【各回の授業計画（内容）】

区分	事前学習	授業内容
第1回 内容	シラバスを読み、目的を意識するとともに学習内容の概容をとらえる。	オリエンテーション 「ことば」の現代的課題
第2回 内容	自身の発語について調査する。	自身の言語経験をふりかえり、分析・考察する 発語に関わって 活動「伝える」について考える
第3回 内容	日本語の音節に関連する学習経験を想起し、自己の知識を整理する。	日本語について考える（1） 日本語の音（音節）の再確認 ・種類 ・構造 ・アクセントの種類と分布
第4回 内容	日本語の文字に関連する学習経験を想起し、自己の知識を整理する。	日本語について考える（2） 日本語の文字の再確認 ・種類 ・成り立ち
第5回 内容	日本語の語彙に関連する学習経験を想起し、自己の知識を整理する。	日本語について考える（3） 日本語の語彙の再確認 ・種類 ・意味
第6回 内容	子どもと言葉の関係における現状や問題点を探り、問題意識を持つ。	子どもと言葉 ・現状と課題 ・幼児期の特性 ・言葉の獲得 ・言葉の発達
第7回 内容	硬筆書写の用具を準備し、学習経験をもとに、要点を予想する。	「書くこと」を考える（1） 硬筆書写の要点と実践
第8回 内容	毛筆書写の用具を準備し、学習経験をもとに、要点を予想する。	「書くこと」を考える（2） 毛筆書写の要点と実践
第9回 内容	便箋、封筒、葉書を用意し、生活経験や学習経験をもち、要点を予想する。	「書くこと」を考える（3） 手紙や葉書の書き方の要点と実践
第10回 内容	『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』を読み、「話すこと・聞くこと」について課題意識を持つ。	「話すこと・聞くこと」を考える。 ・『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』との関連 ・話すことの指導に当たって留意すべきこと
第11回 内容	話す材料を選び、練習する。	「話すこと・聞くこと」の実践と考察 ・壇上で発表する。 朗読 暗唱
第12回 内容	『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』を読み、「読むこと」について課題意識を持つ。	「読むこと」を考える ・『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』との関連 ・読み聞かせの要点や本選びの観点
第13回 内容	読み聞かせを実施する上での要点や課題を予想する。 絵本を選び、読み方を工夫しながら練習する。	「読むこと」の実践と考察 読み聞かせの実践
第14回 内容	昔話や童謡に関する生活体験・学習経験を想起する。	「昔話・童謡」を考える。 ・昔話の特徴 ・童謡に関わる問題
第15回 内容	資料を整理し、授業全体の内容を復習する	言葉の表現者として ～敬語について考える～ 敬語の新分類法、敬語の使い方 授業のまとめ

【資料2】

紹介し合おう

・お音の子(4歳児) 伝えたいけど、どうしていいか...
 子どもが何を言ひ伝えたいかをせがんだりせがみに、聞くようにした。

・ブロックで遊んでいたけれど友達に言えない子(2歳児)
 近くにいて、友達が作っているブロックを「○○と△△のブロック、
 すごいね」と言て、遊ばないようになり、よく聞かされた。

・友達に手紙を渡す時何を言えがに渡したAちゃん(5歳児)
 「何と言て渡したらいいかな?」などの言葉がけをして、何も言えずに
 渡したらどう思うかを相手の気持ちも教えてあげるようにした。

・トレバにいたいた自分から言えず泣く子(5歳児)
 自分から行ける時、保育者は声をかけ様子を見守る。
 その子自身が自分から同じに言えるようにする。
 注: 始めた時声をかけ、どうして泣いているか言えよう、くり返していい。

紹介し合おう

- (1) (6才) フルーツバスケット: 急に「おちんちん」何を言ったのか分からず、
 その子の近くに寄り寄りその子の伝えたい事を
 伝えている。
- (2) (5才) 4人組が「自己紹介」: 自己紹介をしている時緊張して中々
 言葉を言えなかった。その子に対し保育者は
 「大丈夫だよ、一回言えようか」と優しく
 声を掛け緊張をほぐす。
- (3) (4才) (不明)に(不明): 子どもが「おちんちん」や「お音」で言えなくて
 の壁にぶつかるのを心配して、
 中々言えないのかと心配して、
 「おちんちん」か「お音」か、
 「おちんちん」か「お音」か、
 「お音の子」か「お音の子」か、
 「お音の子」か「お音の子」か、

紹介し合おう

- 友達と一緒に遊ぶ時、声をかけられなくて困っている 4歳児女子
 → 話を聞き、一緒に近寄、てい
- いきおい早く手をあげられるようになったら、ちゅう 5歳児男子
 → 言いたいことをくみ取る、「○○、というこでいいかな?」
- 使い慣れた玩具を貸してと言えがに、ちゅう 3歳児男子
 → 順番にとるのはよくない、なんで言うんだ、IT?
- 前に出ると何を言たら言いか分からなくな、ちゅう 5歳児
 → プレッシャーをかけすぎない、最後に手出す、明日言うなど

【資料3】

意見を交換しよう

- ・文字への興味 (五十音表など)
物の隣りなどに書く
- ・様々な表現の仕方が 必ず
- ①先回り(すなわち) 子どもの表現の機会を与える
- ・絵でプリント
- ②子どもの意見を大切にす
- ・まずは 信頼 (保育者 対 子ども → 子ども 対 子ども)
- ・表現 (いろいろな奇行、相手が表現している奇行を体験 (てらり)
- ・好奇心
- ・汚い言葉は訂正する
- ・発表の機会をつくる
- ・ゲーム、劇遊び
- ・保育者自身から
美しく正しい言葉が
好奇心を大切に
発表の機会を作る
家庭との連携

意見を交換しよう

- ・絵本をたくさん読み聞かせたり、普段あまりしゃべらない子にしゃべる機会をつくる
- ・子どもがしゃべる機会をたくさん作り、保育者も子どもと積極的に関わる
- ・子ども同士でコミュニケーションをとれる場面をつくる
- 言葉のレパートリーを増えるようにする
- あまりしゃべるのが好きでない子は 質問などで簡単な会話ができるようにする
- ・間違った言葉を使っている子には、正しい言葉を教える
- ・正しい言葉を使えたらほめる
- ・大人が先回りして言葉を発言しない